

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	日下部 新
論文担当者	主査 島 正之
	副査 若林 一郎
	副査 新村 健
学位論文名	未治療期間が強迫症（OCD）の臨床像や精神病理、治療反応性に及ぼす影響についての後方視的調査
論文審査の結果の要旨	
<p>強迫症 (obsessive-compulsive disorder; OCD) では、選択的セロトニン再取り込み阻害薬 (SSRI) および認知行動療法 (CBT) が第一選択的治療とされている。現在のところ、両者の併用が最も有効で標準的と考えられるが、この反応性にどのような要因が影響するのかについて、いまだ一貫した見解は得られていない。最近では、経過中における強迫行為について、不安を中和するという能動的で目的志向的なものから、不安に関わらない習慣的行動化することが注目され、その背景にある生物学的メカニズムの変移が推定されている。本論文は、発症後から薬物など適切な治療開始までの罹病期間、すなわち未治療期間 (duration of untreated illness; DUI) に注目し、OCD の臨床像や精神病理、あるいは治療予後にいかに影響するかについて、DSM-IV-TR の診断基準を満たし、1年以上治療を継続した OCD 患者を対象に後方視的に検討した。</p> <p>発症から初診まで5年以内のものをS群(134例)、10年以上のものをL群(92例)として比較した結果、初診時にL群はS群に比し有意に高齢で、機能の全体的評定尺度(GAFS)得点は有意に低値であった。Yale-Brown Obsessive-Compulsive Scale (Y-BOCS) で評価したOCDの重症度はL群が有意に高値であり、強迫症状の内容は性的・宗教的なものがL群で高かった。標準的治療を継続したものについて1年後のY-BOCSの改善率は、S群が有意に高率であった。本研究の結果、DUIが長期のものは、より強迫症状が重度で全般的機能水準が低く、治療開始1年後の予後も有意に不良であった。これはDUIがOCDの病像や治療反応性に有意に影響することを示しており、長期化による機能的問題に加えて、背景にある生物学的メカニズムの時間的変遷を反映している可能性が考えられた。</p> <p>本研究は、OCDにおける早期発見、早期介入の重要性を示している点で有意義であり、学位授与に値すると判断した。</p>	